

「中風の人をいやす」という小標題が掲げられます。マタイはこの記事をマルコ2;1-12から得ています。マルコは癒しの物語と論争物語を併せて二重の意味を持たせました。まず古い癒しの物語(マルコ2;3-5a)があり、そこに本来はまったく別の論争物語(マルコ2;5b-10)が挿入されています。ですから、マルコの記事はこの二つの物語が統合されて出来ています。

この物語をマタイは採用して本日のこの文脈に置きました。そこではいつものように、徹底した簡略化が行われています。マルコが記すような、家の中がいっぱいであったとか、友人たちが屋根をひっぺがして中風の人を吊り降ろしたという物語の骨子かと思われる部分さえ省いています。

それでは、マタイは何を語りたかったのでしょうか。それは8節にあります「権威」の捉え直しなのです。当時、広く信じ込まれていたのが治癒行為という権威なのです。もちろん病いの人やその家族にとりまして有効な治療は崇めるべき立派な対象だったことでしょう。即物的な病いの癒し。これに勝る権威は現在でも変わることはないと言えます。

イエスの時代、健康は宗教的意味合いが反映されるものとして考えられていました。人は神の似姿であるから、健康を保つのはいわば神への義務であり、もし病気になったら罪の赦しを得て、初めて病気が治ると考えられていました。つまり、病いの癒しが先行して、罪の赦しはその後を追いかけるという理解が多勢を占めていたようです。マタイがマルコの微に入り細に入る前述したような屋根から吊り降ろされる患者の姿の描写などは、これらの誤解に拍車をかけるものでしかなかったのでしょうか。病いの癒しに権威を置く結果、病気であるが故の差別がまかり通る社会を生み出してしまったのです。だから「罪の赦し」と「病気の癒し」を問われても、答えられないばかりか、3節に登場する律法学者のように「神を冒瀆している」(3)という「悪いこと」(4)しか思い至らない見下げ果てたみすばらしい人間性だけが反応してしまうのです。

そんな閉塞された人間理解に対して、マタイは冒頭ですぐに「元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」とのイエスの宣言を押し出します。

人は誰もが、まず初めに赦された存在であることを踏まえる限り、病いが罪の結果であるなどという理解は決して生まれはしないとの宣言です。ユダヤ教では神の許しを得るため、祈り・悔い改め・あがないの献げ物などが規程されていましたが、イエスはそのようないっさいの手続きなしで「元気を出しなさい。あなたの罪は赦される」という暖かな寄り添いの言葉のみで、人を罪から解放されて、自由であると宣言されるのです。これこそが新しい権威であり、信仰の実質であるとマタイは記すのです。

中風の方は「起き上がって床を担ぎ、家に帰りなさい」とイエスに勧められます。それに応えて彼は家に帰ったといいます。恩に報いよ・ささげ物をせよ・言うことを聞けなどということは言わないのです。家、つまり自分自身を取り戻しなさいと丁寧な勧告だけが残されてゆくのです。

総じてわたしたちの交わりに大切なことは、ただ一つだけなのです。それは眼前に助けを求める人の手を振り払わないことだけなのです。